

きばらの森

学園祭も終わって、ようやく校内が落ち着きを取り戻したある日の放課後。

早めに掃除が終わった祐巳が薔薇の館へ行く
と、そこにいたのは黄薔薇さまだけだった。

志摩子さんや由乃さんは、まだ掃除が終わっていないらしい。令さまは部活だし、祥子さまは家の用事で帰ってしまった。白薔薇さまはどこにいるのかよくわからない。そして紅薔薇さまは、先生たちに学園祭の報告に行っているのだそうだ。

今日は別に薔薇の館で仕事があるわけではないし、祥子さまがない以上、祐巳も残っていないければならない理由はないのだが、黄薔薇さま一人残して一年生が先に帰るというのもなんだか気が引ける。そこで祐巳は、とりあえず二人分の紅茶を淹れた。

「祥子とのゴタゴタはともかくとしてさ」
湯気の立つティーカップを手に、黄薔薇さまが

言う。

「客観的に見れば、柏木さんってなかなかイイと思わない？」

いつも、つまらなそうな顔をしていることの多い黄薔薇さまが、なんだか楽しそうだ。ウキウキしている、といえいいだろうか。

「黄薔薇さまは、ああいう人が好みなんですか？」

思わず不機嫌そうな声になってしまったが、それも仕方がない。祐巳としては、黄薔薇さまの意見には賛同しかねる。祥子さまを泣かせるような人なんて嫌いだ。しかも、親同士が決めたこととはいえ、祥子さまの婚約者だなんて。

嫉妬、かもしれない。だけどとにかく、柏木さんのことは好きになれない。あんな騒ぎがあったのに、うっとりとした表情をしている黄薔薇さまが理解できない。

「そりゃあ、客観的に見れば顔はいいし、頭もいいんでしようし…。でも、男色家ですよ？」

「モロにストライクゾーンよ！」
黄薔薇さまは叫んだ。

「背の高い美形で、ハイソな雰囲気を漂わせてい

て、しかも花寺学院の生徒会長！ わかる？ 花寺といえは男子校よ？」

「それはそうですけど…？」

「男子校の生徒会長…しかも真正銘の男色家。ふふふ…ねえ？」

いや、「ねえ？」とか言われても…。祐巳は戸惑った。

黄薔薇さまロサ・フェティダつてば、どうしてこんなに興奮してるのだろう。

「美形で男色家の生徒会長と、童顔美少年の新入生の禁断の恋！ 最高のシチュエーションよ！ 考えただけで興奮するわ〜」

「……は？」

話が見えない。なにか、間違っているような気がする。

「そういえば先月、ロサ・キネンシス 紅薔薇さまや ロサ・ギガンティア 白薔薇さまと一緒に、花寺学院の文化祭のお手伝いに行ってきたんだけど…」

ロサ・フェティダ 黄薔薇さまは祐巳の方に向かって、テーブルの上に乗れ出すような格好になる。

「その時、可愛い男の子がいたのよ！ ちょうど、

祐巳ちゃんに似た雰囲気の…つい、かまっていじめたくなっちゃうようなタイプ。そうよ、あの子は受にピッタリだわ！ ああ、創作意欲が湧いてきたわ〜。文芸部の会誌に投稿しようかしら。いっそのこと、コスモス文庫の『ノベル大賞』に応募するのもいいかも…」

既に祐巳のことなど眼中になく、自分の世界に入り込んでいる。そんな黄薔薇さまの様子を、祐巳は薄気味悪そうに見ていた。

今までまったく知らなかった黄薔薇さまの一面を見た気がする。

「早く帰って、さっそく執筆に取りかからなくちゃ。ごきげんよう」

ロサ・フェティダ 黄薔薇さまは飲みかけのティーカップを置いたまま鞆を手に取ると、小走りに薔薇の館を出ていった。

「…ごきげんよう」

ばたばたと遠ざかる足音を聞きながら、祐巳は小さくつぶやいた。

* * *

そして翌年の春。

新学期が始まり、新入生も入ってきて、学園全体が華やいだ雰囲気にも包まれている頃、ひとつの噂がリリアン学園高等部を賑わせていた。

曰く『コスモス文庫の新作（青表紙）に登場する可愛い男子高校生のモデルは、紅薔薇ロサ・キネンシスのつぼみの「弟」らしい』と。

コスモス文庫の発売日、M駅ビル内のブックセンターにはリリアンの生徒が大挙して押し掛け、売り上げは記録的な額に達したそうである。

きばらの森・オマケ

もう学校は冬休みに入り、今年も残すところあと数日というある日の夕方。

一人で街に買い物に出かけていた祐巳は、夕方になって家に帰る途中、見覚えのある二人連れを見かけた。

(あれは…黄薔薇さまと、令さま?)

珍しいこともあるものだ。私服の黄薔薇さまと令さまの組み合わせなんて、初めて見る。二人は、薔薇の館に存在する五組の姉妹スールの中でも、一番よくわからない関係だ。どうして黄薔薇さまが令さまを妹に選んだのか、祐巳にはいまだに理解できない。

(でも、あれって…本当に黄薔薇さまと令さま?)

だんだん、自信がなくなってきた。ぱっと見は間違いないと思っただけど、なんだか、まどついているオーラがいつもの二人とはまるで違う。

だからすぐには声をかけず、後ろからそっと近づいていった。

二人とも、両手に重そうな紙袋を下げ、楽しそ

うに談笑している。祐巳は、声が聞こえる距離まで近づいた。

「新刊が完売して良かったですね」

「ホント。荷物が軽くなったおかげで、買い物がたくさんできたわ。今回は収穫も多かったし」

「花寺本、うち以外にもいっぱいありましたね」

「そりゃあ、今はなんといいっても、柏木×ユキチが旬なもの」

「次のコミティア用の新刊は、小林くんも入れて三角関係にしませんか?」

「それより、花寺に美形の先生はいなかったかしら?」

「もちろん、ユキチくんは総受ですよ?」

「当然」

「ふふふふ…」

声を揃えて不気味に笑う二人に気付かれないように、祐巳はそっと距離を開けた。

なんの話をしているのか、よくわからないというか、わかりたくないというか。いずれにしても、この件には関わらない方がいいような気がする。

遠ざかってゆく怪しげな二人の背中を見なが

ら、祐巳はボツリとつぶやいた。

「そういえば、令さまは少女小説マニアだっけ。

今どきの少女小説といえば…そうよね…」

黄薔薇ロサ・フェイダさまと令さまがどうして姉妹スーになったの

か、ようやくわかった祐巳であった。

あとがき

最初に断っておきますが、この作品に対する苦情は一切受け付けません(笑)。

とゆゝわけで『マリア様』のSSです。しかも黄薔薇さまメインロサ・フェティダ。北原初の壊れ系マリア様はいかがでしたでしょうか？

もともとこの作品は、宮上由貴さんのHP『金色のこびとさん工房』に掲載されている『VAL ENTINE FOR (NOT!) LOVERS』とゆゝ作品を読んでいて思いついたものなので、責任の八割くらいは宮上さんにあるのではないかと…(笑)。

マリア様二次創作の新作は、ホントは白×白のシリアスな物語を考えていたんですよ。ロサ・ギガンテア白薔薇さまと志摩子さんの出会いから、姉妹になるまでの。

それを書くためには、資料として『白き花びら』をじっくりと読み返さなきゃならなくて、でもそ

れは精神的に辛くて……ということでは先延ばしにしているうちに、『気まぐれ者の館』の雅さんに先を越されてしまったので、白×白モノは無期延期にしました。雅さんの連載が終わって、ネタがかわらないようであれば私も書きましようか。そろそろ『ポケットの中の十字架』ロザリオも再開しなきゃいけませんよね。今はちよつと仕事忙しいので、一段落ついたら…ということ。

4コマの方は、それほど間を開けずに更新したいと思っています。次回も多分黄薔薇さまネタです。お楽しみに。

二 年二月 北原 樹恒

kitsune@mb.infoweb.ne.jp

創作館ふれ・ちせ

<http://plaza4.mbn.or.jp/~kamuychep/chiron/>

『金色のこびとさん工房』『気まぐれ者の館』へのリンクは、『創作館ふれ・ちせ』内にあります。

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。